

Contents

■特集	
2012年度(第27回) 経済同友会 夏季セミナー(後編) 復興と成長への決断と実行	02
■Doyukai Report	
第1回 会員懇談会 黒川清氏 <small>(元・東京電力 福島原子力発電所 事故調査委員会(国会事故調査委員会)委員長)</small> 「福島第一原子力発電所の事故の検証 — 国会事故調査委員会の報告書を踏まえて—」	17
幹事会 西垣克氏 <small>(宮城大学 理事長・学長)</small> 「東日本大震災から学ぶ復旧・復興と 今後の広域行政のあり方 — 特に医療・衛生の側面から—」	19
■Seminar	
第1196回会員セミナー 小林和男氏 <small>(ジャーナリスト、元NHK モスクワ支局長)</small> 「プーチン復帰の背景と日露関係」	20
第1197回会員セミナー ジュール・イルマン氏 <small>(在日フランス大使館 広報部参事官)</small> 「出生率向上を実現させた フランスの子育て政策」	21
■Column	
巻頭言 藤森 義明 “TRANSFORMATION”	01
リレートーク 芳賀 日登美 「グローバル時代を担うリーダー」	16
私の思い出写真館 齋藤 敏一 「化学技術者としては“落語(伍)者でした”」	22

今月の表紙:世界の文様シリーズ

【ミャンマー／伝統織物柄】

男性も女性も着用するミャンマーの伝統的な巻きスカート、ロンジー用の柄。これは女性用でしょうか、花柄のうねる曲線が魅力的です。

巻頭言

副代表幹事
経済連携委員会 委員長

藤森 義明

LIXIL グループ

取締役代表執行役社長兼 CEO



“TRANSFORMATION”

私が商社を辞めてGEに入ったのが80年代の半ば。原油価格はオイルショック時から急反転し、ほぼ半分の16ドル台になった。いわゆる逆オイルショックだ。同時に商社冬の時代などといった商社無用論がささやかれていた。

戦後、貿易立国日本を支えたのは、ものづくりにたけた日本のメーカーと世界を貿易でつないだ商社のビジネスだった。しかしそれから25年後には、メーカーも商社もそのビジネスモデルを一変した。メーカーのグローバル化は急ピッチで進み、コスト削減を狙った海外生産は東南アジアに急展開する。特に中間材を海外生産することでグローバル・サプライチェーンを進化させた。Made-In-The-Worldはまさに日本が作り出した貿易の新しいコンセプトだ。日本はさらに海外の輸入規制やローカルコンテンツ規制、為替の障壁を解消するため地産地消型のMade-In-The-Marketというモデルを発展させる。グローバル化の波による新興国の台頭に対抗すべく日本企業が出した成長戦略であり生き残り戦術である。一方、商社はビジネスモデルを貿易中心から投資中心に変え、今や投資収入が利益のほとんどを占めているという見事なトランスフォーメーションを遂げた。

日本の企業は世界の環境に合わせて進化している。ダーウィンの進化論によれば日本人こそ最も優れたSpeciesと言えるだろう。しかし国の財政はそうはいかない。最終製品の輸出が減り、中間材輸出が増えるという構図は国の貿易収支にはプラスにならない。海外における地産地消モデルは負の連鎖に拍車を掛ける。私が商社を辞めた時、日本の貿易収支は14兆円だった。ここ数年それはマイナスになっている半面、25年前極めてわずかだった日本の投資利益は14兆円になった。ある意味で大きなトランスフォーメーションが起きたわけだが、これからの成長が見えないどころか日本は危機的状況に直面している。

明治維新以来、日本は大きな危機を何度か経験したがそのたびに大きく歴史を変えてきた原動力は何であったか？ 私は国を開くことと若い人たちが立ち上がったことだと思う。今こそリスクを恐れず第三の開国を行いグローバルの潮流の中で戦うべきではないか。そしてもっと重要なことは未来の日本をつくる若者に惜しみのない最大限の投資をすることではないだろうか。